〔クリスマス・メッセージ〕

希望をもたらす贈り物

ケネス・メイナー

家族を養うため必死で働いてきた一人の父親の話に、わたしは深く感動しました。

あるクリスマスの数日前のことです。幼い五歳の娘が、家の中で最も高価な金色の包み紙を全部使ってしまいました。それを知った彼は、強い言葉で娘を叱りました。

そして、クリスマス・イブ。娘がその包み紙でたった一個の靴箱を包み、クリスマス・ツリーの下に置いてあるのを見て、彼は、怒りさえ感じました。それは、彼が本当に日々のお金に困っていたからでした。さらに、〈靴箱の中に入っているものを買うためのお金はどうやって手に入れたのだろう〉と不思議にさえ思っていました。

クリスマスの朝になりました。幼い娘は、わくわくした様子で、そのプレゼントの包みを彼のもとに持ってきて言いました。

「これは、パパへのプレゼント！」

その箱を開けながら、彼は、自分の怒りが抑えられなかったことが恥ずかしくなり、娘を叱ったことを後悔しました。ところが、靴箱を開けてみると、中は空っぽです。彼の怒りは、再びめらめらと燃え上がりました。

「こら、おまえは知らないのか？」

と、とげとげしい口調で言いました。

「プレゼントをあげるなら、箱の中に何か物を入れるものなんだぞ！」

幼い娘は、大粒の涙をあふれさせながら悲しげに父親を見上げ、小さい声で言いました。

「……パパ、空っぽじゃないよ、あたしは、いっぱい、いっぱい、いーっぱい、あたしのキスを入れたの！」

父親は、その言葉に打ちのめされました。ひざまずき、大切な愛娘を抱きしめると、彼女を叱ったことを心から謝り、赦しを乞いました。

そのわずか数年後のことです。この幼い娘の命は、ある事故によって奪われました。

父親は、この小さい金色の箱を生涯枕元に置いていたということです。彼は、落ち込んだ時、難しい問題に直面した時、その度ごとにこの箱を開け、目には見ることのできない娘のキスを取り出したのでした。そして、かわいい娘が入れてくれた愛を思い返していたのです。

わたしたちも目に見えない金色の箱をもらってはいないでしょうか―子どもたち、家族、友人、そして神様からの、無条件の愛とキスがつまった箱を。あなたの持っておられるもので、これ以上貴重なものは他にないでしょう。

※1 ヴァンス・ハフナーは記しています。

クリスマスは
プレゼントを贈り合う時
神様が人間にくださった
プレゼント―
それは、神様の独り子という
言葉で表せない贈り物
人間が神様に献げるプレゼント―
それは、生けるいけにえ※2
としての
わたしたち自身という
贈り物

神様は、そのすばらしい愛を御子イエス様の力強い人生を通して現されました。イエス様の命は、彼を信じる人々に失われることのない希望と日々の新しい力を与えます。

天の父なる神の御顔を仰ぎ、神様の贈り物であるイエス・キリストを受け取りました、と告白することなしに、だれもクリスマスの希望を経験することはできません。

あなたも、イエス様があなたの友であり、救い主であることを知り、決して失われることのない希望を得られますように、とお祈りいたします。

イエス様の愛した弟子ヨハネは、わたしたちに与えられたすばらしい贈り物についてこのように記しています。

「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。世がわたしたちを知らないのは、御父を知らなかったからです。」

（ヨハネの手紙一　3章1節）

神様からの贈り物―イエス様を喜んで受け取る時、わたしたちは神の家族とされます。そうです。神様は、わたしたちにとって最高の父なのです！

（救世軍士官〔伝道者〕司令官）

※1　アメリカの牧師。数多くの著書がある。
※2　聖書のローマの信徒への手紙一二章一節には、「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」とある。

〔インタビュー〕

詩画（しいが）の１枚１枚が私の証しです

星野富弘さん

花の絵と詩―口に筆をくわえて描いた作品を通して、多くの人に感動を与え続けている星野富弘さんに、お話を伺いました。

―聖書の言葉と最初に出合われたのはいつですか。

星野　高校二年の時です。家は農家だったので、私は豚小屋の堆肥（たいひ）をかごに背負って畑に運んでいたんです。そしたら、畑の裏の土手に真新しい木の十字架が立っていました。クリスチャンもいないこんな田舎に、なんで十字架があるのだろう、と不思議に思いました。そこには

「労する者、重荷を負う者、我（われ）に来たれ」

と書いてありました。ちょうど重い堆肥を汗を流しながら運んでいた時だったので、とても心を惹（ひ）かれました。でも、「我に来たれ」の「我」がわかりませんでした。何度見ても疑問でした。それ以後もよく、その十字架の前を通っていましたが、「我」が誰なのかわからないままでした。

―そして大学を卒業後、中学校の教員になられて大怪我（けが）をされたのですね。

星野　はい。頸髄損傷（けいずいそんしょう）で群大病院に入院しました。人一倍元気だったのが、いきなり動けなくなったものですから、つらい毎日でした。首から下が動かなくなり、人に迷惑をかけるばかりの人生。もう死んだほうがいいのかな……と。

そんな時、大学時代に同じ寮にいた先輩の米谷さんという人が訪ねて来てくれました。米谷さんは、大学を卒業すると牧師になるために神学校で学んでいました。学生時代の思い出などをひとしきり話して、帰る前、米谷さんがお祈りをしてくださったんです。それが、大きな声でお祈りするんですよ。恥ずかしかったです。大部屋だったので、周りの人が聞いたらどう思うだろうか、と、そればかり考えていました。（笑）

その後、米谷さんから何度も手紙をいただいたり、米谷さんの知り合いの人を通して聖書をいただいたりしたのですが、信仰に頼るのは自分の弱さを認めるみたいで、ベッド下のダンボール箱に聖書をしまいこんでいました。

そんな時、同じ病棟に入院していた方が、『塩狩峠（しおかりとうげ）』という本を貸してくださったんです。

―クリスチャン作家三浦綾子さんの著書ですね。

星野　当時、三浦綾子さんがどんな人か全然わかりませんでした。題名から、山の本かな、と読み始めました。元気な時、山が好きで、山の本をよく読んでいたのです。

『塩狩峠』に山の話は全然出てきませんでしたが、（笑）やめられなくなりました。どんどん引き込まれて……。最後のページを読み終わった時は、自分が変わったかと思うほど感動しました。

そして、次に貸していただいた同じ著者の『道ありき』という本を読み、三浦綾子さんの生き方に感動しました。十三年も脊椎（せきつい）カリエスで寝たきりだった三浦綾子さんが、何だか自分の先輩のような気がしました。そして、その本の中で、あの言葉に出合ったんです。

―「労する者、重荷を負う者、我に来たれ。」

星野　そうです。聖書のマタイによる福音書一一章二八節の言葉だということがわかりました。

「すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（新改訳聖書）

神様の存在を急に身近に感じました。私が神様を知らない時から、その言葉―後に苦しい思いをするようになる私に一番ピタッとくる言葉を、神様は早くから用意してくださっていたんだな、と。

そのうち、三浦さんの本を貸してくれた人が属している教会の牧師が、私のところにも訪ねて来られるようになりました。牧師は、後で読むようにと、聖書を開いたまま帰られるんです。読まないわけにはいきません。（笑）それなら、最初から聖書を読んでみようと、聖書を読むようになりました。あのマタイによる福音書の言葉はこのような話のところに書いてあるのだ、などとわかり、どんどん読み進んでいきました。

―そして、クリスチャンになる決心をされた……。

星野　はい。その後、牧師は一カ月に一度くらい来てくださるようになり、その教会の青年会の人たちも度々（たびたび）、来てくれるようになりました。そんな日々の中で、〝クリスチャン〟という人たちのことを知っていき、私も彼らのようになりたい、と思ったんです。

そして入院して三年目の一九七四年、病室で洗礼を受けました。看護婦長は普段おっかない人でしたが、洗礼のことを話すと、とても喜んでくれて、そのために病室を一部屋空けて（あ）、使わせてくださいました。

―花の絵と詩はいつごろから描くようになられたんですか。

星野　入院して二年目です。最初は字を書こうと思ったんです。転院して行った中学生が帽子を送ってきて、それに寄せ書きをしてほしい、と言

星野富弘（ほしの とみひろ）さん プロフィール

1946年、群馬県東村（現・みどり市）に生まれる。1970年、頸髄を損傷、首から下の自由を失う。1979年、最初の作品展を開く。その後、雑誌や新聞に作品やエッセイを掲載するようになる。1982年、高崎市で「花の詩画展」を開催。以後、全国各地、また海外でも詩画展を開き、大きな感動を呼んでいる。1991年、東村立富弘美術館開館。2005年、富弘美術館新館開館。2006年には、熊本県芦北町に芦北町立星野富弘美術館開館。

著書に、『愛、深き淵より』（立風書房）、『かぎりなくやさしい花々』、『花の詩画集　鈴の鳴る道』（偕成社）、『銀色のあしあと』（いのちのことば社）、『山の向こうの美術館』（富弘美術館）、『新編　四季抄　風の旅』、『詩画集　ありがとう私のいのち』（学研パブリッシング）、『いのちより大切なもの』（いのちのことば社）など多数ある。

ってきたのです。ペンを口にくわえ、母が帽子を動かしてなんとか文字を書きました。目まいはするし、吐き気はするしで、大変でした。でも、いろんな人から手紙をよくもらっていたので、自力で返事を書きたい一心で、工夫し、頑張っているうち、だんだん慣れてきました。

ただ、長い文章は書けません。余白がいっぱい出るのが気持ち悪くて、空白を埋めようと、枕元にあった花を描きました。そのうち、絵を先に描いて、その周りに文字を書いたほうがバランスがとれることがわかりました。

また、絵にサインペンで色をつけてみたら、描くのが俄然面白くなりました。それらを人に見せると喜んでくれるので、いい気になって、どんどん描くようになりました。

―「詩画」というのは、星野さんがつくられた言葉でしょうか。

星野　すでに聞いたことがあったように思いますが、自分の絵と文をそのように表現しました。

入院して九年目の時、病院の近くにある「身体障害者センター」の所長が訪ねて来られました。展覧会を開かないか、ということでした。最初は恥ずかしさが先にたち、断っていましたが、所長があまり熱心に勧めるので、根負けして開いていただきました。すると、大盛況で、会場に置いた感想ノートにも、たくさんの方が感動したとの声を寄せてくださいました。また、新聞やテレビ局の取材もくるようになりました。

―障がい者センター所長の熱意はすごいですね。

星野　はい。反響の大きさを、所長は我がことのように喜んでくださいました。

その後、東京の出版社から、作品を雑誌に載せたい、と申し出がありました。また、これまでのことを本に書かないかという企画ももちこまれました。小学校の日記も姉に書いてもらっていたくらいでしたから、（笑）できるかどうか不安でした。でも、センター所長は、ぜひやるように、と。彼は、とても感激屋で、私の詩画にすごく感心してくださるので、つい乗ってしまいました。

怪我をしてからのことは、断片的で、覚えていないこともたくさんあると思っていたのですが、書き始めると、どんどんよみがえってきて、それまで悩んでいたことが整理され、スカッとしました。

―それが、最初に出版された『愛、深き淵より』ですね。

星野　はい。これらのことで、自分のやるべきことが見つかった気がしました。詩画を描くことが一生の仕事にできそうだな、と。そして、このまま病院にいつまでもいられない、と思いました。でも、家は山の中だし、帰ったらもう外に出られないかもしれません。すると、この時も所長が背中を押してくださいました。

「家を改造すれば、車椅子で十分生活できる。どんなことでも自分が手伝うから」と。こうして、家を改造して、九月に退院しました。電動車椅子に乗ればひとりで動けることにも、勇気を与えられました。

その後、朝日新聞の群馬版に一カ月に一回、詩画を連載するようになりました。連載の仕事を始めるとすごく力が出てきて、明日が来るのが楽しみになりました。この連載は十年続きました。

―星野さんは野の花もたくさん描いていらっしゃいますね。

星野　きれいに咲いている花より、小さくて、どこにでもあるような花、虫が喰ったようなもの、散りかけたものに親しみを感じるんです。自分と同じようなものをそれらの中に見るからかもしれません。

すべてのもの――花も神様が創られた、と知ってから、どんな花にも価値を見いだせるようになりました。例えば、まむし草。蛇が鎌首をもたげたような姿で、私は子どもの頃、大嫌いでした。でも、この形も神様がこの花を守るために創られた、と思ってから、もやもやしていたものが、一挙に解決しました。人に迷惑をかけるばかりの私みたいな者も、堂々と遠慮なく生きていける。元気な人と同じように幸せになれる。神様を信じて得た喜びは、どんな境遇になってもなくならない、と。

―星野さんの詩画はどのようにつくられているのですか。

星野　最初の頃は母でしたが、退院してからは妻が、そばにいて助けてくれています。筆を口にくわえると、言葉で指図はできません。初めの頃は、「うー、うー」しか言えない私の前で妻があたふたすることが多かったのですが、今では二人三脚もスムーズになりました。

一枚の絵が完成するのに、一週間～二十日くらいかかりますね。スッとできることもありますし、産みの苦しみをする時もあります。

詩は、絵を描き始めた時点でだいたい頭の中でできています。聖書の言葉を入れることもずいぶんあります。神様から著作権料を請求されるんじゃないか、と心配しています。（笑）

母上と昌子夫人

―星野さんの詩画を展示している美術館は、今年二十五周年を迎えられたとか。

星野　はい。一九九一年に東村山の「富弘美術館」として始まってから二十五年です。現在は新しい建物になり、「みどり市立富弘美術館」として、年間十万人を超える人に来ていただいています。皆さん、実際に美術館で見る絵は違う、と言ってくださいます。開館当初から書いていただいた感想文のノートは、七十冊を超えました。また、寄せられた手紙類は膨大な量になります。本当にありがたいですね。

この館長をしているのは私の幼馴染みで、小学から高校まで一緒だった親しい友人です。彼の下に十数人の職員ほか、たくさんのボランティアの方々がいて、美術館を運営しています。詩画の展示だけではなく、朗読会や詩に曲をつけたコンサートも開かれています。耳でも詩画を鑑賞していただければ、と思っています。

私の詩画の一枚一枚が、私の証しです。聖書から力をもらい、礼拝で勇気をもらう、そのようなクリスチャンの幸いが伝わればいいな、と思っています。

（日本福音キリスト教会連合　前橋キリスト教会 所属）

草木湖のほとりに立つ美術館

朗読会→

↓館内

〔インタビュー〕

神様の御業に拍手！

河井ノアさん

二〇一〇年、映画『昆虫物語　みつばちハッチ～勇気のメロディ～』が公開されました。

この映画のキャラクターデザインを担当し、その他数多くのアニメーションキャラクターを世に送り出し、現在は絵本作家としても活躍している河井ノアさんを訪ねました。

―「ハッチ」―この名前を聞いて、懐かしく思う人はたくさんいると思います。

河井　そうですね。私もとても懐かしいです。ハッチは、当時私がいたアニメーション製作会社「タツノコプロ」の作品です。その頃、「みなしごハッチ」の絵本の三部作を描かせていただき、また他の作品のキャラクターデザインの仕事も数多くさせていただきました。これらの経験が、現在の私が携わっている仕事の基となっているように思います。

―そうですか。ところで、「ノア」という名前は、聖書からとられたのですか。

河井　はい。幼い頃、近くの教会でいただいた豆カードに「ノアの方舟」の絵がありました。神様に従い、動物たちを連れて、大洪水の中、生き残ったノア。私もあやかりたいとペンネームにしました。ちなみに、河井の河は大きな水。井は小さな水。大きく小さく、です。

―聖書に出合ったのはいつごろですか？

河井　三十六年ほど前の話ですが、私がタツノコプロを退社する前の最後の仕事が「アニメ親子劇場」のキャラクターデザインでした。子どもたちが聖書の世界にタイムスリップするお話です。当時、テレビで聖書のストーリーを放映するなんて奇跡のようなことでした。企画、シナリオを担当した夫も、私も、この番組の中で神様を知り、イエス様に出会ったような気がします。そして、退社後、「アニメ親子劇場」を通して知り合ったキリスト教伝道グループの会社と契約させていただきました。ノアという名前から、クリスチャンだと思ったそうです…。（笑）その時、つくったキャラクター、こぐまの「リトル・ジョイ」は、今でも子どもたちに御言葉を運んでいます。

こぐまの「リトル・ジョイ」

―その中で信仰をもつようになったのですね。

河井　それが、当初、聖書の御言葉に携わるお仕事をいただきながら、紹介された教会にも行ったり行かなかったりで、洗礼を受ける決心もなかなかできないでいました。今が変わることを求めていなかったのです。

そんな時、宣教師として来日したマデリンという女性と出会い、よく食事に招かれるようになりました。何もない小さな部屋に大きなテーブルが一つ。おいしい食事と楽しいおしゃべり。彼女は宣教師なのに聖書の話はほとんどしませんでしたが、いつも訳のわからない英語で大声で祈ってくれました。あの時、何を祈ってくれたのか、今ならわかる気がします。少しして、夫の希望でマデリンから聖書を学ぶようになりました。マデリンにお願いしたら、彼女は、私たちが飼っている猫を連れて来ることを条件に（笑）引き受けてくれました。それで息子と猫を連れて、毎週金曜日に学びに行っていました。

―そして、クリスチャンになる決心をされた……。

河井　はい。このような日々の中、私はマデリンの生き方に惹かれていきました。病気があり、何も持っていないのに、いつもニコニコ幸せそうにしているんです。ある時、

「あなたはどうしてそんなに幸せなの？」

と尋ねると、

「私はなーんにもしていないのに、神様から先にご褒美をいただいてるからね。ノアもそのご褒美、一緒にいただいてるのよ」

って…。その時、〈ああ、先にいただいているご褒美ってイエス様のことだ。私はこんなに愛されてたくさんご褒美をいただいているのに、何もお応えしていない。〉そう強く思わされました。

―それで、どのようになさったのですか。

河井　それからすぐ、マデリンがアメリカに帰ることになったんです。体の具合が悪くなり、母国で手術を受けるということでした。彼女が日本を去る前の日曜日、

「マデリンから洗礼を受けたいんだけど、今度日本に来る時まで、私は何をして待っていたらいいの？」

と聞きました。すると、マデリンはものすごくうれしそうな顔をして、

「ハレルヤ！」

と叫び、

「OK！　レッツゴー！」

と言うと、私たち家族を車に乗せて走り出しました。着いたのは多摩川。

―多摩川！

河井　はい。九月の初めで、午後の陽に水面がキラキラ輝いていました。マデリンはそれを見て、

「神様があなたを祝福しているのね。カモン！」

と、ずんずん川の中に入って行きます。私もあわてて川の中へ。お腹の具合が悪いのに、私を神様のところに連れていくために、マデリンは命をかけ

ているんだ…。冷たい川の中を進むマデリンの後ろ姿を見ながら、胸がいっぱいになりました。そして、

「あなたはイエス・キリストを信じますか」

と問われ、

「はい、信じます」

と答えると、私がイメージしていた前向きにではなく、仰向けに水の中に沈められました。それは、神様に全身をゆだねる、これからの人生を全くゆだねる、ということを実感させられるものでした。

—すばらしい洗礼でしたね。

河井　ええ。もう喜びで一杯になりました。全身ずぶ濡れで岸に戻ろうとしていると、当時、十三歳だった息子が、川の中をザブザブと歩いて来ます。私を迎えに来てくれたのだろうと思っていたら、横をスーッと通り過ぎて、マデリンのほうへ。そして、

「ぼくも洗礼を受けたい」

と。母と子が同時に神様の子どもとされた祝福の時でした。

—クリスチャンになって、どのように変わりましたか。

河井　仕事を選別・聖別（神聖なものとして区別すること）するようになりました。それまでのように、依頼されて絵を描くという形式はやめて、すべてオリジナルの絵本をつくろう、と決心したのです。夫と共に、神様のことを伝える絵本をつくる—聖書の言葉を子どもたちに、食べやすく、でも栄養はそのまま、という形で届けたいと。

—ということは、ご主人もクリスチャンに？

河井　はい。あの多摩川で、「カモーン！」と言うマデリンの呼びかけに、岸辺で手でバツ印をつくって答えていた夫ですが、二年半後、クリスチャンになりました。私はこれまでの人生で、良かったと思うことが二つあるんです。一つはクリスチャンになったこと、もう一つは、夫と結婚したことです！

—その後、息子さんは？

河井　プロの和太鼓奏者となって、演奏活動とともに、教会や公共の施設で和太鼓教室を開き、神様を賛美しています。家族で祈りの力を感じて、感謝しています。

私の母も、神様を信じています。今、九十七歳、認知症のため昨年から施設に入っています。母は、今まで持っていたものをみーんな忘れ、何もいらなくなって、いろんなものから自由になり、穏やかな毎日を送っています。

母上と息子さん

夫君と↓

—お母様のところへはよくいらっしゃるのですか。

河井　はい。週に一、二回。ある日、母を訪ねた時、すばらしい経験をしたんです。

その日、母の車椅子を押して施設の屋上に行きました。少し前まで雨が降っていたんですが、パーっと晴れたので、一緒に空を眺めよう思ったんです。母は空が大好きなんです。すると、不思議なことが起こりました。空の一部がモワ、モワ、モワと動いたかと思うと、いろんな色の筋が現れ、見る間にくっきりと七色の虹になったのです。大きくアーチを描いて、それはそれは美しい虹。

「ママ、すごいね！　神様って、すばらしいね！　拍手して、お礼を言おう。神様、ありがとうございます！」

母も手をたたいて、大きな声で言いました。

「神様ー、ありがとうございます！」

—虹が生まれる瞬間をご覧になったのですね。

河井　まだ続きがあるんですよ。その虹の上で、また空がモワ、モワと動いて、もう一つ虹が現れたんです！　屋上には、私たち二人だけ。母は目を丸くして

「あっら～！」

神様からのすてきなプレゼントです。本当に幸せな時でした。

—他にどんなプレゼントを？

河井　先日、一般の雑誌のインタビューを受けた時、隣り人—助けを必要としている人—のそばに行く（寄り添う）、ということを話しました。すると、その記事を、名前の知られた予備校の先生が読まれて、テレビ番組の中で紹介されたんです。聖書の御言葉が、電波に乗って数え切れない人に届けられました。

また、映画の舞台挨拶をする機会があった時、互いに愛し合いましょう、ということを話しました。すると、翌日のスポーツ新聞の囲み記事にそのことが載ったんです。またまた、たくさんの人々の目に触れる証しとなりました。ねっ、すてきなプレゼントでしょ。

—すばらしいですね。さて、ノアさんのビジョンはどのようなものですか。

河井　子ども伝道です。夫と一緒に制作するすべての作品を通して神様を伝えること。

最近、信じられないような事が起こりました。夫と私が神様に出会うきっかけとなった、三十六年前に放映された「アニメ親子劇場」。今年の初めに、この作品のスポンサーだったあるキリスト教団体のアジア支局長が訪ねてみえました。3Dアニメでリニューアルするということで、夫と共にインタビューを受けました。その時、長い間祈り続けてつくった、復活をテーマにした「西のカカシ」という物語を聞いていただき、ぜひアニメーションをつくってほしい、とお願いしたのです。死ぬことが終わりではない、喜びの復活があることを、子どもたちに伝えたい、と。

それから祈って祈って…。すると、今年の六月に再び彼が来日しました。私たちの絵本で、すでに出版されている『ファーマーさんはみすてない』『はくさい夫人とあおむしちゃん』と、「西のカカシ」まとめて三本のアニメーションをつくりたい、とのことでした。神様の御業に涙があふれました。神様は三十六年前のアニメーションから新しい事を起こされたのです！

「見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。」

（イザヤ書43章19節　新改訳聖書）

（カンバーランド長老キリスト教会　めぐみ教会 所属）

河井ノア（かわい のあ）さん プロフィール

1972年「タツノコプロ」入社。絵本や幼年誌のイラストを描き、やがてテレビアニメのメインキャラクターのデザイナーとなる。その後、愛らしく親しみやすいキャラクターでメルヘン路線を任される。1981年、タツノコプロ退社後は、イラストレーター・絵本作家として活動し、脚本家の夫君柳川茂と共作で、子どもたちにイエス・キリストを伝える絵本をつくっている。